大阪支部例会　学習会によせて

佐々木賢太郎とは

はじめに

10 月 30 日、研究部例会で石田先生（立命館大学）が「佐々木賢太郎の実践に学ぶ」をテーマに講演されました。佐々木賢太郎の教育思想、著書「体育の子」の分析、そして佐々木実践の今日的価値や意味を語って頂きました。編集部からは、この講演会の全貌を報告するのは紙面が不十分だということで、佐々木賢太郎を知るための基礎的な事柄を書くよう依頼されました。しかし、恥ずかしながら、今まで「体育の子」佐々木賢太郎という偉大な教育思想をもった体育実践家の存在を知っているだけでした。にわか勉強で佐々木賢太郎についての周辺部分の不十分な紹介になりますがご了承ください。なお、これは石田先生の講演前に先立ち執筆し入稿したものです。

佐々木賢太郎の略歴

1923 年 3 月 3 日、大阪市に生まれる。母が田辺市の出身。小学 6 年時白浜に移る。田辺商業に入学。1942 年日本体育専門学校師範科（今の日本体育大学）に入学。体育教師の道を選んだのは、田辺商業の恩師、田所双吾氏の感化による。翌 43 年学徒出陣。終戦時クアラルンプルで捕虜となる。1946 年復員し、母校の田辺商業に体育教師として就任。以後紀南の中学、高校の教師を歴任。紀南作文教育研究会の事務局長となり「命を守る体育」の実践を追求する。1956 年には「体育の子」発行。著書多数。新体連創設者の一人。「紀南体育」発行、勤評闘争、「紀南保体研」発足等、数々の組織活動や研究業績あり。1994 年 10 月 29 日死去。享年 7 1 歳。

戦後の体育実践に多大な影響を与えた

佐々木賢太郎の「体育の子」は、多くの人びとに影響を与えました。その中の一人、中森孜郎氏（宮城教育大学名誉教授）は、自身の退官の際、最終講義でまず第一に佐々木賢太郎の「体育の子」を取り上げています。

私は一体育教師として現場にとびこんでいった、その頃、私が出会ったのが和歌山県の中学校体育教師、佐々木賢太郎の「体育の子」という実践記録であった。佐々木の実践は、戦前の体育への反省に立ち、生活綴り方の教育理念と方法を体育に生かそうとするものであった。そして、まず第一に、生命を守り育てることを保健体育の実践の根底にすえ、第二には、体育の基本的役割はからだづくりにあるとした。第三は、子ども自身が自らのからだを守り、からだづくりに立ち向かう主体となるために、認識活動と身体活動の統一をはかろうとし、そのために書かせることを大切にした。第四には、からだが弱く、体育の苦手な底辺の子どもを中心にすえ、一人の悲しみや喜びをみんなのものとする集団づくりをめざしていた。そして、人間性を喪失した機械的な技術主義に陥ることを戒め、「体育の教師は体の技師であると同時に魂の技師でなければならない」ことを強調した。

（中森孜郎著「教育としての体育」大修館書店 1996 年より）

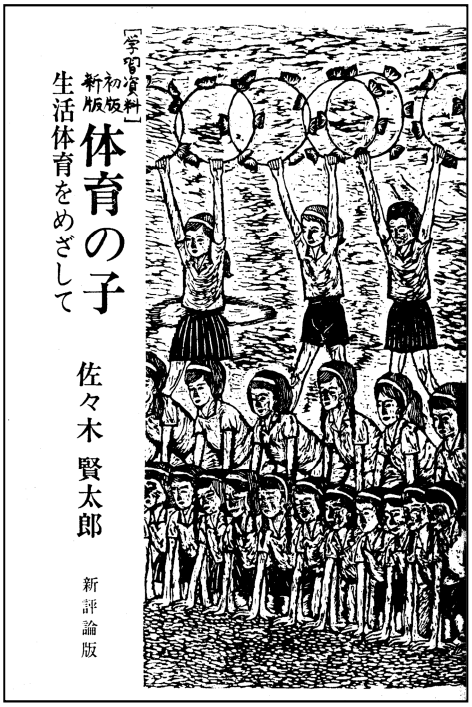
同志会和歌山支部と佐々木賢太郎

佐々木賢太郎は、1973 年体育同志会全国夏季研究集会「白浜大会」では実行委員長を務めています。この時、和歌山での同志会の会員は佐々木とあと一名。二人の会員で全国大会を主管できたのは、今では考えられないことですが、佐々木が教室の中だけの実践家に留まらず、各方面での活動で得た抜群の組織力によるものだと言えます。

和歌山では、原先生や山野先生をはじめ多くの方が生前の佐々木賢太郎との親交が厚く、その教育者としての偉大さを肌で感じられています。支部研究会では、佐々木の講演会を何度も開催しその教育思想や仕事を受け継ごうとされていましたし、今でも、佐々木賢太郎を冠した「白浜集会」を継続されています。また支部ニュースでは、93 年 10 月号から「ケンタロウの教育の窓」「『体育の子』への道―佐々木賢太郎　自分史を語る―」94 年 11 月号まで連載されました。94 年 10 月 29 日に亡くなられていますので、この自分史の連載⑤少年期の頃のことが絶筆となったと思われます。心筋梗塞という余りにも突然の死で、各方面に大きな衝撃と悲しみを与えました。佐々木の死後、彼の仕事を引き継ごうと紀南作文教育研究会、同志会和歌山支部、日本体育大学大学院保健体育科など多くの団体が追悼の冊子を作成しました。

佐々木賢太郎と中村敏雄氏

今回講演者の石田先生は、常々「戦後日本で教育思想をもった偉大な体育実践家と言えば、東の中村敏雄、西の佐々木賢太郎」と語っています。その中村敏雄氏が佐々木賢太郎の追悼文を書いています。その一部を紹介して、私の役割を終えたいと思います。



今にして想えば、「体育の子」の時代はこれ以上の貧しさはないといえるほど貧しくはあったが―たとえば風呂に水は 1 週間は変えないなど―、精神は自由であった。すくなくとも今よりは自由であった。和歌山にはトレパンを買えない子どもがいたが、東京にいたわれわれも、手拭いで汗をふきながら、タオルで汗をふく慶応大学の選手をうらやましく思い、彼らが使う真白いボールとつぎはぎで変形した鼠色の重いボールと見比べていた。それでも精神は今ほど拘束されていなかったし、貧しくもなかった。つくづくとどちらが幸せなのかと考えざるを得ないこの頃である。　（中村敏雄「いま、佐々木賢太郎」日本体育大学大学院　1995 年より）